

- 註48 位沢、横尾、山本畑2号住、熊倉1～6号住、里宮、兵士山、井堀、新水A1～4号住、同B1号住、沖ノ沢、竹之城原、七本松3号住、八丁原、池尻、稻葉S住の23棟でこのうち熊倉遺跡についてはカマドの詳細な報告はないものかなり大型の石組カマドが5棟あると報じられている。
- 註49 大場磐雄（1954）「灰釉陶器の諸問題」『地方研究論叢』
- 註50 信濃史料刊行会（1956）『信濃史料第1卷考古篇上』
- 註51 檜崎彰一（1968）「瓷器の道（1）」『名古屋大学文学部二十周年記念論集』
- 註52 林和男氏（1977）が『菅平高原山本畑遺跡』の中で「上小地方のこの時期のすべての集落址から灰釉陶器が出土しているといつても過言ではない」としている。
- 註53 宮下健司氏の御教示による。
- 註54 赤羽一郎氏の御教示による。
- 註55 註51に同じ。
- 註56 註54に同じ。
- 註57 入間田宣夫（1976）「平安時代の村落と民衆の運動」『日本歴史4古代4』岩波書店
- 註58 能登健（1983）「熊倉遺跡の再調査」『群馬文化193』

#### 4 御所平の流人伝説と地名

はじめ、Ⅲ章2歴史的環境の中で、横尾遺跡に近い信州峠や、小尾道について甲州側には口碑伝説が多いが、信州側には皆無だと聞いておいた。ところが、小尾道と直接関係の有無は別として、御所平に古くから流人伝説があるので記しておく。

小尾道は信州往還とも呼ばれ、御所平はその重要な宿駅に当り、ここを基点として十文字・十石・碓氷峠等への通行が想定されていた。そして黒森から12キロといわれる道路は、峠の手前から黒沢川の流路に沿ってその両岸に拓かれ御所平に到着している。御所平は確かに甲州側の古文書に多く出てくるように、小尾道を中心とした重要な宿駅であり、通路の横尾山は、古くから牧場として、また、木材や桶子材の採取場として御所平にとって関係の深い土地であった。

12世紀の中頃、保元の乱に破れた崇徳上皇は、讃岐に流罪されたが皇子重仁親王の行方については流罪とも戦死とも知られていない。その重仁親王が、僅かの主従で落ちのびて住まわせられた土地が、この御所平という地名の発祥であると伝えられる。同じ筋の伝説が、隣り合わせの北相木と南相木の両村に伝えられていて、北相木より南相木へ、更に峠を越えて御所平に移られたという。親王が越えて来たという峠を臨幸峠と呼んでいる。親王峠の嶺で、はるばる都の空を顧みて感懐を込めた歌を、

うちびさす都をいでて千曲川かみつせ遠くわれはきにけり

と詠ませられた。

戦時中佐久に疎開されていた、佐藤春夫先生は重仁親王の事蹟を尋ねて、幾度も川上村に足を運んでいるが、先生の小説『佐久の内裏』の中でこの歌について、格調の高い貴人の歌であると激賞している。

保元の乱には佐久の武士も多く参戦し、御所平の地名も出ているという。重仁親王は再起の夢もはかなく此地に登遐され、内裏山の麓に葬り、幾歳月を経て後、弘治元年（1555）に至り栄上に一字を建て、天児屋根の命、応神天皇の二神を鎮め御靈宮または御陵社として祭った。ところが元禄年中内裏山の山火事で類焼し宮殿、宝物等が焼失し、再建の後再び元治元年（1864）の大暴風で社木と共に社屋も倒壊した。なお古記録については、明治の中頃、丸山某という地方の歴史家に調査研究を依頼したまま死去され、行方不明になったと伝えられている。

御靈宮は寛永6年（1629）の幕府検地では、高七斗五升除地になっている。当時は、十数名の社地作人が有り棟札に残っているが、維新の改革で上地され、現在は僅かの山林と昭和の初め建替えられた木造神明造りの社が残されているのみである。

御所平には、この伝説に由来するという地名が多く残されている。村名の御所平・本郷・内裏山・じんでぐち・大かいと・馬場平・詰堀・大門先・鷹揚場・鷹放・天主の台・兵部・天神林などでこれは『南佐久郡古城址調査』に取りあげられた地名で、同書には「相当の地位があり、勢力のあった豪族が居住し、御所平は深い関係があったであろう」と書いてある。

この他にも中世以来の古い小字名が幾つもあるように思われるが、もっと重要なことは古文書にも、小字名にも書かれなかった地名というものが調べてみると沢山あるのではないかということである。筋違いかも知れないが、そういう地名を少し詮索すると大かいとの中に“なかごや”とよばれる場所があり、“かなやま”という場所にはかつて“かなやまさま”的祠が祭ってあった。向い合う山を“かじやばやし”と呼んでいるのも無関係ではない。『南佐久郡古城址調査』で詮索しあぐんで、伝説の古城址という位置を想定したのだが、実際には見当はずれの場所に“しろした”という地名が伝えられて、千曲川を隔て大門先に対している。

以上その他にもまだまだ有ると思うのだが、肝心なことは是等の地名は、既に文書からも大方の人々からも忘れられて、僅かにそこの土地の幾人かの耕作者によって伝えられ消え去る寸前にあったものであることを知っていただきたい。

（由井茂也）